令和6年度目標達成シート

基本方針

「指定管理提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館の基本方針を以下のとおりとする。

1. 資料：歴史と文化の〈継承〉
(1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。
(2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。
(3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等、着実に準備を進める。

2. 展示：歴史と文化の〈発信〉
(1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し「江戸東京の歴史と文化」の多彩な魅力を発信する。
(2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。

3. 教育：歴史と文化の〈学舎〉
これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。

4. 運営：歴史と文化の〈拠点〉
「3S方針」（Safety:安全・安心、Service:おもてなし、Sense of Wonder:感動する博物館）を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。

5. 研究：歴史と文化の〈究明〉
江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。

6. 交流：歴史と文化の〈展開〉
(1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物館と、国際シンポジウム、学芸員の相互派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。
(2)東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。
また、国際博物館会議を国際交流促進の場として捉え積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。
(3) 両国・深川地域の文化施設、区、関連機関等との連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。

	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度基準値	R6年度実績値
観覧者数（人）	420,254				
自主事業等参加者数（人）	37,324	97,174	28,085		36,051
デジタルアーカイブス（公開資料画像数）	15,783	11,210	96,133		98,076
ホームページアクセス件数	6,077,768	1,469,111	1,928,785		2,000,738

※R8年春（予定）まで大規模改修工事のため休館

令和6年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

		令和6年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
重点1	1	資料：歴史と文化の〈継承〉 ●「江戸東京の歴史と文化」を国内外に発信できる資料の収集を行うとともに、「江戸博コレクション」を適切に管理保管する。 ●収蔵資料の全件公開に向けて、デジタルアーカイブスを充実させるため、資料データの整備を促進する。 ●大規模改修工事に伴い外部倉庫に移動した資料を適切に保管するとともに改修後の再収蔵の手順を検討する。	●学芸員の調査活動により、希少価値の高い資料を収集でき、コレクションの価値を高める活動が継続できた。また、外部倉庫に収蔵する資料の保存管理業務を安定して遂行した。 ●新規に9万8,076点の資料データを公開し、累計約22万点のデジタルアーカイブを行った。並行して次年度の公開に備え、およそ10万9,000点の資料情報を確認、1万6,850カットの写真撮影を行った。
		評価指標　デジタルアーカイブスでの公開画像点数	公開画像点数　9万8,076点
重点2	2	展示 ： 歴史と文化の〈発信〉 ●大規模改修工事に伴い常設展示室の改修工事及び展示準備を行い、 リニューアル・オープン後も 「江戸博コレクション」 を最大限に活用できる展示計画を準備する。 ●休館中もたてもの園や他の博物館等において、 質の高い展覧会を開催する。 ●リニューアル・オープン後の魅力的な展覧会の計画を準備する。	●常設展示の改修後の魅力向上を意識した展示準備を継続した。 ●パリ日本文化会館および東京都美術館にて特別展を実施。全国各地で巡回展等を実施し、それらの広報や関連事業を通じ、事業運営のノウハウを蓄積することができた。 ●令和8年度における3本の自主展、2本の共催展のラインナップを策定した。
		評価指標　常設展示及び展覧会計画の準備	常設展示改修後計画の改定、令和8年度展覧会ラインナップ策定、令和9年度特別展の準備
重点3	3	教育：歴史と文化の〈学舎〉 ●博物館へのアクセスが難しい対象に向けて、クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業として移動博物館を実施する。 ●リニューアル・オープン後の教育普及事業の運用を構想する。	●移動博物館事業として、出張展示8回、ワークショップ40回を実施。島しょ部の8件、特別支援校の6件を含む実施を通じ、需要の把握や知見の獲得を継続した。また、「ハイパー江戸博　日本橋繁昌記　江戸のお金編」を公開し、教育関係者への働きかけを強化した。 ●移動博物館で「学生サポートスタッフ」を試行導入し、都立中央図書館、深川江戸資料館での実地経験で得られた知見を教育普及関係事業の計画に反映させた。
		評価指標　移動博物館事業の満足度	移動博物館事業の満足度：100%（満足：91%　概ね満足：9%）
重点1	4	運営：歴史と文化の〈拠点〉 ●お客様の安心・安全を第一として、ショップやレストランをはじめあらゆるミュージアムシーンにおいて、おもてなしと感動を与え続ける博物館であるために、リニューアルオープンに向けた準備を着実に進めていく。 ●オンラインの更なる活用をはじめ綿密な広報戦略を展開するとともに、リニューアルオープンを見据え、休館中においても江戸博の魅力を国内外に広く発信する。	●お客様の安全・安心を実現するセキュリティ関連設備等の設置、建物管理・警備・案内業務の再開、ショップ及びレストランの事業者を選定するなど、リニューアルオープンに向けた準備を進めた。 ●動画による新規収蔵資料の紹介、季節・年中行事に合わせた収蔵品の紹介や民間企業との連携において館の認知度拡大に努め、効果的・計画的にSNSで情報発信した。
		評価指標　リニューアルオープンに向けた施設運営計画の準備	広報相談機関等による助言を通してリニューアルオープンに向けた計画を検討
	5	研究：歴史と文化の〈究明〉 ●大規模改修工事中のリニューアル準備室内に開室する仮設図書室において、事前予約制による閲覧サービスならびにレファレンスサービスを実施し、都民サービスの継続を図る。また、改修後の開架書庫・閲覧室への図書の再配架の手順を検討する。 ●江戸東京の歴史と文化に関する調査研究（外部機関との連携を含む）の成果を紀要、資料叢書などの刊行物、「えどはくカルチャー」の実施をとおして広く都民に還元する。	●外部倉庫に移送した図書資料を適切に管理するとともに、リニューアル準備室内の仮設図書室において、事前予約制による閲覧サービス（令和6年12月末まで）ならびにレファレンスサービスを実施した。 ●館員の研究活動の成果を『紀要』『史料叢書』や「えどはくカルチャー」などに反映し、江戸東京に関する研究センターとしての学術的役割を果たした。
		評価指標　仮設図書室における閲覧・レファレンスサービスの継続、刊行物の出版、カルチャー満足度	仮設図書室における閲覧・レファレンスサービスの実施。『紀要』『史料叢書』の刊行。 「えどはくカルチャー」の満足度：95.5%
重点2	6	交流：歴史と文化の〈展開〉 ●都民はもとより世界各地の人びとの注目を集めるべく、江戸東京博物館が持つ豊富な情報を広く深く発信する。 ●江戸東京博物館を、両国→墨田→東京→日本の文化発信の拠点としてさらに定着させる。 ●アジアや欧米の主要都市の博物館・美術館との交流を、さまざまな事業を通して促進する。	●日中韓3カ国4館の国際シンポジウムが北京首都博物館で「博物館教育の革新と未来の発展」をテーマに9月21日に開催され、各館代表の2名が発表を行った。 ●アムステルダム博物館を会場として開催された都市博物館のコレクション・活動国際委員会（CAMOC）の年次会議に参加し、10月10日に発表を行った。 ●当館ならびに国立歴史民俗博物館（歴博）が事務局館を務める「全国歴史民俗系博物館協議会」（歴民協）の総会を7月に歴博で開催した。川崎市市民文化局からの依頼により、川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキュー支援の呼びかけを歴民協事務局から加盟館に行うとともに、連絡調整を行った。
		評価指標　国際的なプレゼンスの向上（海外の研究者や研究機関との研究交流件数）	海外の14研究機関と研究成果物である『紀要』等の相互交換を行い、研究情報収集と発信を行った。機関リポジトリを活用して『紀要』等を公開、発信し、国内外からのアクセスを可能とした。
	7		
		評価指標	
	8		
		評価指標	

総合的な所見（自己評価の総評）

長期休館3年目においては、東京都の大規模改修工事との調整や博物館運営のために必要な施設・設備等の再整備を行った。展示事業では、パリ日本文化会館および東京都美術館で特別展を開催したほか、継続的に実施している「移動博物館」については、式根島や特別支援学校などの来館が難しい方たちへ展開した。収蔵資料のデジタルアーカイブスやスマホアプリ「ハイパー江戸博」の開発継続など、デジタルコンテンツも充実させて、休館中も様々な場所や媒体で楽しんでいただけるよう、事業を継続した。また、たてもの園や都美術館等での「えどはくカルチャー」の開催、北京首都博物館で開催された国際シンポジウムやアムステルダム博物館で開催されたCAMOC年次会議での発表、紀要等の刊行により調査研究の成果を発表した。その他、都内会場での伝統芸能公演の展開や広報誌の発行、SNSの活用や民間企業との連携などにより、休館中においても江戸博の活動を発信し続け、プレゼンスを維持した。リニューアルオープンを見据えた休館期間の最終年に向けて、職員全員が創意工夫しながら再開館の準備と事業の両面において、積極的に業務に取り組むことができた。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

大規模改修工事のために休館して3年目という状況の下で、いよいよオープンが見えてくる時期となり、一層展示関係の業務が増えていくことと思われるが、所見から見て、出来る限りの事は挑戦し成果を上げたことが見える。また、工事の進捗管理を行いつつ、大量の収蔵資料の外部倉庫での保管・管理に万全を期す一方で、江戸博のプレゼンスを多様な発信事業によって維持しつつ、更に高め、再開館後の活動基盤の強化を着実に築いている取組みを高く評価する。

今回の評価の対象としたそれぞれの事業も着実に行っており、パリ日本文化会館や都美術館での展示もあり、職員の方々の負担が大きかったことと思う。ただ外部での展示が大変好調であるので、今後も機会があれば、時々はパリや上野での活動も行えると良いのではないだろうか。合わせて、式根島や特別支援学校など来館が難しい方たちに対する「移動博物館」は、今後もぜひ継続していただきたい。また、収蔵資料のデジタルコンテンツの充実等、所蔵資料へのアクセシビリティを高める一方で、基本的運営方針に則った着実な資料収集、調査研究の充実といった、博物館としての基本機能の充実に努める取組み姿勢は、今後の日本の博物館が抱える課題解決に向けた指針とすべき博物館としてのあるべき姿が見て取れる。特に、博物館の根幹であるコレクションの持続的充実のために、共通収蔵庫構想等、再オープン後の革新的な「未来志向」の取組みにも注目したい。

こうした取組みが進められる背景には、設置者である東京都とともに運営主体の財団との密接な連携において中長期的経営方針の共有の下、現場のマネジメント、職員の自覚的業務の遂行という、それぞれの部門がしっかりと機能する、これまで江戸博が培った「前向きな博物館運営」の成果の蓄積があることが各事業の評価からも明確に窺える。再開館後の江戸博が日本の博物館の先駆的役割を担うことを大いに期待している。

【江戸東京たてもの園】

令和6年度目標達成シート

資料3-2

基本方針

「指定管理提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館および江戸東京たてもの園の基本方針を以下のとおりとする。

1. 資料：歴史と文化の〈継承〉
(1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。
(2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。
(3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等着実に準備を進める。

2. 展示：歴史と文化の〈発信〉
(1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し、江戸東京の歴史と文化の多彩な魅力を発信する。
(2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。

3. 教育：歴史と文化の〈学舎〉
これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。

4. 運営：歴史と文化の〈拠点〉
「3S方針」（Safety:安全・安心、Service:おもてなし、Sense of Wonder:感動する博物館）を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。

5. 研究：歴史と文化の〈究明〉
江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。

6. 交流：歴史と文化の〈展開〉
(1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物館と、国際シンポジウム、学芸員の相互派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。
(2)東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。
また、国際博物館会議を国際交流促進の場として積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。
(3) 多摩地域の文化施設、関連機関などとの連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。

	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度基準値	R6年度実績値
観覧者数（人）	116,052	214,083	230,978	250,000	233,186
自主事業等の参加者数（人）	0	6346	17,729		19,530
HPアクセス件数	7,280,091	7,870,777	9,405,452		8,861,780
情景再現事業の入園者数・参加	6,529	39,431	39,167		40,695
昔くらし体験参加者数（人）	505	2,212	2,283		1,393

令和6年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

		令和6年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
重点1	1	資料：歴史と文化の〈継承〉 ●30棟の復元建造物に対し、長期保全計画に則り修繕を実施する。また、緊急修繕工事や日常の軽微な補修等を確実に遂行し、来園者の安全確保と文化財の保存管理を図る。 ●旧武蔵野郷土館所蔵資料に関し、適切な保存管理を継続し、順次デジタル化を推進し、「江戸博コレクション」の一部として江戸東京博物館デジタルアーカイブスに掲載して公開を進める。 ●虫菌害、獣害などから復元建造物や収蔵資料を保護するための対策を行う。	●工事費高騰等により修正が必要となっていた長期修繕計画の修正交渉を東京都と協議しながら修繕工事（三井八郎右衛門邸、デ・ラランデ・邸、武居三省堂）、実施設計を、事故なく完了することができた。 ●たてもの園デジタルアーカイブプロジェクトとして前川國男邸を3Dデジタル化し、デジ×たて図鑑としてToMuCo上で公開した。 ●総合的有害生物管理IPMの手法により、引き続き適切な資料管理を実施した。
		評価指標　長期修繕計画に基づく修繕の実施状況	事故なく予定通り工事を実施することができた。
重点1	2	展示：歴史と文化の〈発信〉 ●復元建造物の展示では、季節感の演出など体感性の向上に努める。また、ホームページやX(旧Twitter)などのSNSを活用した情報発信を推進する。 ●休館中の本館に代わり、江戸東京の歴史と文化の発信と継承に資する特別展示を開催する。 ●情景再現事業は建造物の構造や機能を体感できるような内容で実施する。	●復元建造物内部では季節感のある展示を演出するため、定期的に展示替えを実施し、ホームページやSNS等を活用して積極的に情報発信した。また復元建造物内の古くなった演示品・パネルなどを順次更新した。 ●工事休館中の江戸東京博物館に代わって江戸東京の歴史と文化の魅力を発信するための江戸東京博物館コレクション展「江戸東京のくらしと乗り物」、「江戸東京のくらしと食べ物」を開催した。 ●情景再現事業では、体感・体験を重視した楽しいプログラムを実施し好評を得た。また近年の気候変動により対策が求めれていた「下町夕涼み」における荒天対策などを取りまとめ安全・安心の運営に注力した。
		評価指標　令和6年度観覧者数	233,186人（達成率93.3%）
重点3	3	教育普及：歴史と文化の〈学舎〉 ●園の代表的な教育普及事業である「昔くらし体験」を確実に遂行すると共に、これを外国人、障害者、家族・小グループ等の来園者属性に合わせアレンジした事業の定着を図る。そのための環境整備を検討する。 ●ホームページ上に様々な学齢に応じた学習プログラムを掲載、オンライン事業を展開する。 ●高齢化や共生社会などの社会課題の解決に貢献する「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」に園の特性を活かしながら取組む	●園の代表的な教育普及事業である「昔くらし体験」は、「昔の道具」に準拠した「囲炉裏体験」から「地域の移り変わり」に準拠した「おつかいゲーム」に内容を一新し、学びの体験性を高め、教育指導要領小学校社会科3年の目標により適合させることができた。これにともない受け入れ人数の制約から実績数値は減ったが、今後の工夫等により、実施効率を高めていきたい。 ●ホームページ上の「えどまる図鑑」に新しいプログラムを9点追加し、内容の充実をはかった。 ●クリウェル事業として新たに手話動画、触察模型の製作など多岐にわたる成果を生んだ。
		評価指標　教育普及事業の参加者数	情景再現事業40,695人（103%）、昔くらし体験1,393人（61%）
	4	運営：歴史と文化の〈拠点〉 ●「来園者」「園スタッフ」「博物館資料」の安全確保を第一に、「危機管理」を最優先の課題として取り組む。 ●ショップやレストランをはじめ、あらゆるミュージアムシーンにおいて、来園者の心に残るような行き届いたサービスを提供する。	●「来園者」「園スタッフ」「博物館資料」のいずれも大きな事故なく安全第一の運営を実現した。 ●園内のレストラン（蔵・武蔵野茶房）、ミュージアムショップの満足度は、非常に高い満足度を獲得することができた(来園者アンケートの分析）。
		評価指標　顧客満足度	顧客満足度調査総合満足度99.3%、たてもの園実施のアンケート結果98.1%
重点1	5	研究：歴史と文化の〈究明〉 ●復元建造物の展示や解説を充実させるとともに、建築の専門博物館にふさわしい展覧会などを開催する。 ●旧武蔵野郷土館資料を中心に、多摩地域の文化資源の調査研究を進める。 ●博物館事業のデジタル化に係る調査研究を進める。	●特別展は、いずれも学芸員の力量が遺憾なく発揮された、質の高い展覧会を実現することができた。 ●武蔵野地域の歴史研究に独自の役割を果たした武蔵野郷土館の調査活動に光をあて、武蔵野地域研究の歴史の一端を明らかにした。東京の博物館発展史としても有意義な展覧会であった。
		評価指標　研究成果の公開	たてもの園セミナー、『紀要』15号、ミュージアムトーク、たてもの園ナビ等を通して、復元建造物・屋外展示物に関する詳細情報を発信した。
重点2	6	交流：歴史と文化の〈展開〉 ●小金井市をはじめとする関連諸団体と連携し、事業の実施及び広報の相互協力により、発信力の強化を図る。 ●多摩地域唯一の都立文化施設として、地域の博物館をはじめ広く内外の野外博物館と連携し、地域の活性化に寄与する。 ●地域の連携、活性化に取り組む。	●ビジターセンター、休憩場において写真展・パネル展を開催するなど小金井市が主催する小金井桜名勝指定100周年記念事業に支援し、積極的な情報発信で事業の推進に貢献した。 ●園内のレストラン、ショップ、キッチンカー等を小金井市商工会を通して手配し、来園者サービスを向上させながらも地域経済の振興に寄与した。 ●小金井市文化連盟と協力し、復元建造物を活用した花席・茶席を設け、日頃の稽古を披露する場を提供するとことで伝統文化の継承に寄与した。
		評価指標　地域等との交流実績	「名勝小金井（サクラ）名勝指定100周年記念事業」、小金井市さくら祭りなどを通して小金井市と連携し、「花と光のムーブメント」の開催にあって東京都公園協会と連携した。
	7		
		評価指標	
	8		
		評価指標	

総合的な所見（自己評価の総評）

令和4年度以降、すこしずつではあるが着実に来園者数を伸ばしているが、来園者目標は今年も達成できなかった。しかし厳しさを増す気候条件のなかでも、予定された事業はほぼ予定通り実施し、大きな事故なく安心・安全の運営を実現し、高い満足度を獲得することができた。復元建造物の長期修繕計画にもとづく予防修繕、日々発生する不具合に対する日常修繕とも適切に実施し、物価人件費の高騰等を踏まえた新しい計画に再編した。博物館事業の中核をなす特別展についていえば、担当学芸員の力量が光る展覧会を年間をとおして開催することができた。また集客の要ともいえる5つの情景再現事業は、いずれにも新しい企画を含み、集客も昨年度実績を上回っている。博物館の質を左右する教育普及事業では、昔くらし体験の内容を変更して体験性を高め、世代間対話型プログラム「間取りインタビュー」を初めて実施した。東京学芸大学との連携しながら「企画提案型ボランティア」を第1段階まで着実に推進した。東京都の政策と連携しながら推進したクリウェル事業、スマカル事業も多くの成果をだしている。また長年膠着状態にあった小金井カントリー倶楽部からの飛来球問題も、実効性のともなった措置が提案され大きな進展がみられた。今後の課題としては、正念場を迎える学芸大学との連携事業の推進、自然倒木への対応するための予防伐採処置、イベント時におけるゲリラ雷雨対策の推進、事務棟等の経年劣化に適切に対応し、たてもの園の次世代人材を育成していくことがあげられる。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

コロナ対策に精力を使った数年が終了して、それ以前の平常業務の状態に戻ったと考えられるだろう。多くの事業が以前に近い状態で進行していること、その努力を高く評価したい。懸案であったボランティア制度の改革も、第一段階を踏みだし、今後の充実が期待できる状態となってきていると認識できよう。各種のイベントは、徐々に増加し、内容が充実してきた、と想像しているが、負担が過剰であれば、思い切って停止し、他のイベントに置き換える、というようなことがあってもよいと思う。前年と同様の指摘であるが、やはり、現存の建築の修理について、大規模な修理ができない、ということは何とかして改善されるべきだろう。具体的には、東京都の指定、小金井市の指定を受けることである。一気にそれが実現するわけではないから、継続的に指定を進める必要がある。障害となっていることを早く解決して、先に進むべきと考える。

令和6年度目標達成シート

基本方針

東京都写真美術館は、日本で唯一の写真と映像を専門とする総合美術館として、写真・映像に関する文化の振興に寄与するため、平成7年1月に恵比寿ガーデンプレイスに開館致しました。
以降、当財団は、世界にも数少ない写真・映像の総合美術館の運営を担う団体として、「写真・映像とは何か」という根本的な問いに答える展覧会プログラムを組み立て、記録としての写真・映像や、芸術としての写真・映像、報道としての写真・映像など、写真・映像が持つ多様な性格や表現により、如何に人々に豊かさや潤いを与えていけるかを追求してまいりました。
今後も、写真と映像のセンター的役割を担う美術館として「存在感」を高めていくことを基本コンセプトに、ホスピタリティーの高い館運営を行ってまいります。
以下は、基本コンセプトを支える5つの美術館像と、当財団として取り組む重点目標であり、写真美術館はこれらを実現するため、質の高い展覧会はもとより、専門性に裏打ちされた多様な事業を展開することにより、東京の代表的文化施設の一つとして貢献し、その存在感を国内外に示してまいります。

〈基本コンセプト〉
我が国唯一の写真・映像の総合美術館として、センター的役割を担う「存在感のある美術館」を目指します。

〈5つの美術館像〉
① 質の高い写真・映像文化と出会う美術館
② 写真・映像文化の新たな創造を支援する美術館
③ 過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館
④ 写真・映像文化の拠点として貢献する美術館
⑤ 開かれた美術館

館の運営に当たっては、館の基本コンセプトである「存在感のある美術館」とこれを支える5つの美術館像を目指すとともに、財団総体で取り組む3つの重点目標を達成するため、以下の目標を設定し、毎年、進捗状況を管理しながら事業を進めてまいります。
とりわけ、写真・映像に係る技術の進展や、それに伴う社会生活や価値観の変化、新たな表現など、時代の動向を具に捉えながら事業展開に努めます。また、国内外に写真・映像の館の存在感を示すため、写真・映像を専門とする総合美術館としてこれまで培った専門性を発揮し、質を重視した展覧会を実施するとともに、保有する国内外の美術館や国際交流基金等のネットワークを活かした共同企画、SNS等の効果的な情報ツールを積極的に活用した戦略的広報を推進してまいります。

	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度基準値	R6年度実績値
観覧者数（人）	209,004	318,262	335,721	380,000	374,990
自主事業入場者数（人）	17,712	26,137	31,645		31,277
図書室利用者数（人）	10,268	20,739	23,698		25,673
支援会員法人数（法人）	222	221	211		211
HPアクセス件数	4,450,870	5,700,109	4,631,452		2,941,779
付帯事業収入（千円）	4,207	5,898	5,785		8,510

令和6年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

		令和6年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
	1	『質の高い写真・映像と出会う美術館』にふさわしい展覧会の実施 国際動向や社会との関連等を踏まえた専門的調査研究に基づき、収蔵コレクションの有効活用を図りながら、来館者に感動を与えるとともに、一般の鑑賞者から専門家まであらゆる人々に満足度の高い展覧会を開催してまいります。	○収蔵展、自主企画展、映像祭、誘致展を組合わせ、写真・映像に興味がある方達へ多層なレイヤーをつくりながら、15本の展覧会を開催した。 ○日頃の調査研究を質の高い展覧会や関連事業へ活かしながら、30周年事業も開始し、館の存在感を高めた。
		評価指標：展覧会満足度、関連事業の参加者数、展覧会評数	収蔵展・自主企画展　来館者満足度平均90.7%%、関係事業の参加者数7,163人、展覧会評数25本
	2	『将来性のある作家の発掘と創造活動の支援』 将来の活躍が期待できる写真・映像の新進作家に対する作品発表の場の提供により、登竜門や跳躍台の役割を果たすとともに、作品鑑賞による刺激体験を通じて、作家や鑑賞者の文化創造活動を促進してまいります。	○日本の新進作家展、恵比寿映像祭などを通じて、写真・映像表現における新進作家の作品を紹介し、関連事業への出講等により作家・作品と来館者を結ぶ取り組みにつとめ、写真美術館発のアーティストの発掘、作品の収集を行った。 ○恵比寿映像祭の「コミッション・プロジェクト」では特別賞を選出し、令和8年度に個展を開催する新進アーティストを決定した。
		評価指標：新進作家展、映像祭に登用した作家の活躍（収蔵点数、受賞件数、個展の開催件数、作品集の制作件数など）、関連動画のアクセス数	○恵比寿映像祭2024特別展示の金仁淑氏が文化庁芸術選奨文部科学新人賞受賞。 ○「日本の新進作家展vol.21」出品の金川晋吾が木村伊兵衛写真賞にノミネートされた。 ○新進作家作品の収蔵（5作家21点） ○恵比寿映像祭2025 出品作家 マティアス・ピニェイロ　グッゲンハイム・フェローシップ2025受賞、　他 ○恵比寿映像祭2025 配信動画取材 2件　再生回数946回
重点1	3	『写真・映像文化の礎となる収蔵コレクションの充実・発信』 貴重な作品を的確に収集・保存するとともに、展覧会を通じて、文化の担い手である子供や若者にも届くよう、積極的に発信いたします。また、ICTなど最先端技術を積極的に活用し、当館コレクションに加え、江戸東京博物館、現代美術館など都立文化施設が所蔵するコレクションを併せた「東京都コレクション」を国内外に発信してまいります。	○収集方針、収集の新指針に基づき的確に作品を収集し、主催する展覧会等で早期の公開を図った。また、資料情報システムの充実を図り、収蔵品データの登録・公開につとめた ○令和6年度新規公開データ　テキストのみ3,146件(R5実績411件)、画像4,883件(R5実績7,258件)　公開点数39,852件（R5実績36,285件）（うち画像付きデータ31,203件、R5実績26,360件）
		評価指標：収蔵品の活用件数、デジタルアーカイブのアクセス件数、館外への作品・画像貸出実績	令和6年度　資料情報システムアクセス件数　訪問数267,501件(R5実績65,551件) 閲覧履歴2,668,165pv（R5実績1,793,722pv）
	4	『国内外の写真・映像に関する美術館等との連携』 蓄積した国内外のネットワークをより一層強固にしていくとともに、当館が収蔵する写真・映像コレクションや高い専門性を活用して、展覧会の国内外の巡回、共同研究やシンポジウムなどの事業連携を促進するなど、国内の写真・映像文化の振興に貢献してまいります。また、CCBTや企業、大学とも連携を進め、映像祭等でデジタルテクノロジーを活用した新たな芸術文化の鑑賞機会を提供してまいります。	○写真作品の共同研究を継続した。（広島市現代美術館、台北市立美術館、SFMoMA、MoMA、ポンピドゥセンター他）。 ○恵比寿映像祭では、YGPと連携してスカイウォーク（動く歩道）や店舗も展示スペースとして活用し、恵比寿駅周辺の各施設等と連携するなど、作品鑑賞の機会創出を拡大した。
		評価指標：国内外の文化施設や研究機関との共同企画や巡回展の実施件数、専門的会議への参画などの件数及び成果	○巡回展準備「鷹野隆大」展、広島市現代美術館 ○米マッカーサー財団の天才賞を受賞した直後の作家を招聘展示し、アーティストトーク、上映等を恵比寿映像祭期間中に開催、他
重点2・3	5	『多様な来館者に対応した事業の推進』 誰でも参加できるワークショップや特別支援学校のためのプログラムを実施したり、年齢や障害の有無、ルーツ等に左右されず、あらゆる人が美術館を楽しめる日を設けるなど、様々な参加機会を作ります。鑑賞サポートをはじめとするボランティアの活動の幅を広げたり、福祉、教育等に係るNPOや地域の団体等と連携して事業を展開することにより、芸術文化の支え手の裾野を拡げてまいります。	一般団体「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」によるワークショップなどインクルーシブなプログラムや手話による展示解説動画の作成、目黒区の子ども食堂や社会福祉協議会、住民会議等と連携した、子どもからシニア、留学生など、異世代、異文化交流を楽しむ居場所づくり等を実施した。
		評価指標：インクルーシブなプログラム実施件数、参加人数、参加者満足度、ボランティア活動参加人数、スクールプログラム参加人数、うち特別支援学校受入件数、NPO・その他教育機関等との連携件数	インクルーシブなプログラム実施14件/165人、参加者満足度95%、ボランティア活動参加人数のべ488人、スクールプログラム実施45回/811人（うち特別支援学校受入2件/35人）、NPO・その他教育機関等との連携8件
	6	『基幹的事業である展示事業等の観覧者数の確保』 展示事業は、作品収集・保存、調査研究、教育普及事業など、館の活動総体が収斂された美術館の基幹的事業です。年間観覧者数380,000人を目標とし、目標達成に向け、わかりやすい解説、理解を深める関連事業や、ターゲットに合わせた効果的な広報を展開します。 あわせて、1階上映ホールでは、アート＆ヒューマンを基本的コンセプトに据えた、館ならではの上質な作品の上映事業及び展覧会に関連した講演会などを実施してまいります。	○基幹的事業の柱となる収蔵展・自主企画展では目標値119.2%を達成し、ギャラリートークやワークショップ等で内容理解を深める機会を創出した。上映、館内外でのイベントを開催し、SNSを活用した広報等、多角的な展開により、前年比112%となる374,990人の来場者数となった。
		評価指標：年間観覧者	参考目標値：380,000人　実績：374,990人（98.7%） 【内訳】展覧会361,800人　上映事業等　13,190人

総合的な所見（自己評価の総評）

【質の高い展覧会事業の実施】 日頃の調査研究に立脚した重点収集作家の個展や多彩な切り口での質の高い展覧会を開催し、現代社会の課題をふまえた新進作家展を開催するなど現代社会を考察する場を創出した。国際動向を見据えたテーマで開催した恵比寿映像祭では、「コミッション・プロジェクト」を継続開催し、日本から国際発信する作家の機会促進を通して、ネットワーク作り、写真映像業界の発展に寄与した。総合開館30周年記念事業を開始し、館の存在感を高めた。
【社会包摂事業の拡充】 障害の有無にかかわらず、あらゆる人々が参加できる多様なプログラムを実施した。手話ナビゲーターによる館内案内動画の作成など、より一層幅広い事業展開を行うとともに、恵比寿映像祭では子供から高齢者、障害のある方、外国ルーツの方等が楽しめる多様なサポートやプログラムを実施した。また、収蔵展、自主企画展に伴う「担当学芸員によるギャラリートーク」では手話通訳付きギャラリートークを継続実施した。
【安定的な運営】 社会情勢が要因となり企業の収益が悪化する中、支援会員制度を維持し着実に運営していくための積極的な各種取組みや、助成金、協賛金等の外部資金を積極的に獲得し、収支バランスの取れた運営ができた。上記1～6の目標に対して満足できる成果を上げることができたと考えるが、今後さらに充実させていきたい。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

・全体として高い評価となった。
・展覧会は、集客に関して成果を上げている。収蔵展はあらゆる属性の来館者が楽しめる工夫がなされ、自主企画展は、「日本の新進作家」展が作家の受賞機会となるなどその役割を果たし、恵比寿映像祭では、作品を恵比寿駅方面に向けて外に展開したことにより周知に貢献すると同時に、地域に根付いた展開となり地元に貢献した。誘致展は外部との共催によりバリエーション豊富な展示が行われた。
・総合開館30周年記念事業が開始され、令和7年度を通して、館のプレゼンスがさらなる向上が期待される。
・作品・資料の収集・管理は、実施方針に基づき、適切かつ堅実に実施されている。ジェンダーバランス是正の視点を取り入れる等、時宜にあった工夫をしている。
・作品資料情報システムはデータベースの充実に向けて地道な努力がされており、所蔵品の増加につなかっている。
・教育普及事業では、学校との連携に向けた新たな取組みや、様々な人が学ぶ機会の創出など、多彩なプログラムが実施され、写真表現への理解を深め、かつ効率的に学ぶ機会が提供されている。。
・地域連携は、恵比寿映像祭だけでなく庭園美術館との協働など、地元コミュニティの活性化に貢献した。

【東京都現代美術館】

令和6年度目標達成シート

資料3-4

基本方針		令和6年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
文化の創造と魅力あるメッセージの発信 ①現代美術の国内外への発信 ②現代美術の保存と継承　（コレクションの充実・保全・公開） ③広範な関心への応答	1	■総合美術館として、調査研究／展示／教育普及等、貴重な美術資料を様々な形で提供するとともに、魅力溢れる最先端の現代美術の表現を国内 外へ広く発信する。 ■国内外の人々、特に次代の芸術文化の担い手である子供や青少年に、日本発の「現代」と「美術」の魅力をより積極的かつ効果的に発信する。	■現代美術の幅広い表現を展覧会、教育普及、関連事業等を通じて国内外へ発信できた。 ■話題性に富む大型の映像インスタレーション、日ごろの学芸員の調査研究に基づく日本現代美術史展など、分野や領域を拡大する展覧会をバランよく実施し、開館以来第1位となる総観覧者数を獲得し、内外に館の魅力をアピールした。 ■事業や調査研究を通じ、国際的な組織、作家、関係者等のネットワークを推進した。 ■当館での展覧会を契機に出品作家の開発好明氏が芸術選奨文部科学大臣賞を、MOTアニュアル展出品の川田知志氏が第2回絹谷幸二芸術賞を受賞。
		評価指標　年間観覧者数	年間観覧者数758,066人（コレクション展135,395人、企画展622,671人）
	重点1 2	■収蔵作品・資料等の充実・活用を通じ、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、新たな視点で日本の美術のコンテクスト形成を目指す。 ■専門家との協働や最新の調査研究の成果に基づいた着実な管理（保存・修復・展示）によって、貴重な作品を未来へ伝える。 ■コレクションの活用、他美術館・博物館への貸出協力を行うとともに、海外での東京都コレクション展の開催など財団他施設との連携で展開する。	■フロア毎にテーマを変えたり、作家のディレクションによる特別展示を行ったり、新規収蔵作品を積極的に公開したりするなど、さまざまな切り口と工夫で、コレクションの魅力を発信するような展示を開催した。 ■専門家と協働しながら19点の修復を進めることができた。 ■国内外の美術館等へ41件・104点の作品貸出を実施した。 ■コレクション検索サイトを活用し、画像とともに展示中や貸出中の作品情報を発信した。（年間PV1億5832万P超／1日平均43万3千P超）
		評価指標　コレクション（収蔵品）のデジタル撮影点数、　新収蔵作品のデジタルデータの入力件数	収蔵作品のデジタル撮影 829カット／新収蔵作品のデジタル入力 113件
現代美術の普及と次世代の担い手を育む ④優れた作品等の鑑賞機会の提供 ⑤現代美術の普及と子供達の育成 ⑥新進・若手作家をはじめとする文化の担い手への支援	重点3 3	■現代社会の広範な関心に対応し、東京の社会課題に美術をとおして向き合う場となることを目指す。 ■最先端の情報の収集と堅実な調査・研究に基づいたプログラムの提供により、来館者に「知る喜び」を伝える。 ■デザイン、ファッション、建築、音楽、映像、アニメーションなど、他ジャンルを幅広く取り上げることで多様な関心に応える。 ■上記事業全体をとおして、財団内連携によるクリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーに参画する。	■活躍著しい注目の若手作家のグループ展、社会課題やアクセシビリティへの取り組みを行った企画展、国内有数のプライベート・コレクションによる日本現代美術の再考展、中堅作家の多様な活動を包括的に示す個展、世界的な音楽家でありアーティスト、故坂本龍一の思考を多彩なアーティストとのコラボレーションによって提示する企画展など、現代の表現を享受する場を創出できた。 ■「翻訳できないわたしの言葉」展は車いすでも移動しやすい導線、手話による解説動画の充実、映像作品の音声スクリプトを配布するなどアクセシビリティに配慮した展示の工夫を多数行った。
		評価指標　クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業の件数、参加者数	「言葉」展：アクセシビリティに配慮した多彩なプログラムを実施。聴覚や視覚に障害のある方、外国人向けに11のプログラムを実施し、参加者数624名。
	重点1 4	■先端的表現／展示手法により国内外の現代美術を紹介し、ファッション、映像等、様々なジャンルを幅広く取り上げることで新たな客層を獲得する。 ■収蔵作品、資料等の充実・活用を通じて、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、優れた鑑賞機会を提供する。	■展覧会ごとに異なる共催や協賛・協力の仕組みを持ちながら、各関係機関・関係者、作家との細部にわたる確認を繰り返しながら課題をクリアし、安全無事に実施できた。 ■注目度、満足度が高い展覧会の実施により、企画展全体としては、昨年度を上回り過去1番の動員を獲得し、定性評価も一般来館者、専門分野双方から企画・展示内容への理解を得られ、高い評価となった。 ■約5,800点の収蔵作品を中心に3期にわたり多様なテーマのコレクション展を開催した。
		評価指標　コレクション展示の出品・公開点数	コレクション展における収蔵作品公開　566点
あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現 ⑦　アクセシビリティの整備 ⑧　地域連携の強化	重点2 5	■収蔵作家が現存する特性を活かした活動、体験型展示との連動など子供でも分かりやすい方法を工夫し、創造力・鑑賞力を高める教育普及活動を展開する。 ■アーティストによるワークショップや新たな情報デバイスの活用など、様々な体験をとおして、現代美術の普及に取り組む。 ■学校との連携や高齢者対象、障害があっても参加することができるプログラムなど、様々な年齢や興味に応じたきめ細やかな事業を展開する。	■スクールプログラム全体や講座、ギャラリークルーズ参加者が増加、昨年度を大きく上回る実績があった。 ■団体鑑賞では、盲学校や肢体不自由学級、入院中の子どもたちなどとの鑑賞プログラムに加え、手の行き届きにくい中学生・高校生といったユース世代の参加者が倍増するなど、鑑賞者の裾野を広げることができた。 ■現代作家によるワークショップや学校訪問、手話通訳やワイヤレス補聴援助システムを活用したトーク等を通じ、多様な参加者に対して創造力・観察力の可能性を拡大する事業ができた。
		評価指標　教育普及プログラムの参加者数及び満足度	教育普及プログラム参加者　9,122名　満足度94%
	6	■才能ある芸術家の発掘・支援のため、新しい創造活動や作品発表の機会提供や作品の収蔵などを行う。 ■学校をはじめ、国内外機関、地域企業やNPOなど様々な人々とのネットワークを形成し、文化の担い手の裾野を広げる。	■コレクション展においては、収集した若手作家の作品公開という形で、若手作家の支援を行った。 ■企画展においては、MOTアニュアル展等若手作家の創作発表の場を創出した。 ■「アーティストの一日学校訪問」等の事業を通じて、将来的な文化・芸術の担い手の裾野を拡げ、多角的な視野へと導く事業を展開した。
		評価指標　若手作家への支援数（作品公開・展示・収集等）、インターン受入れ	若手作家への支援　作品公開42点／展覧会における作家4名／収集4名・30点
	重点3 7	■設備面のみならず、手話通訳の導入や普及プログラムの提供などソフト面でのバリアフリーを促進する。 ■総合的な視点から、多言語化を含め、誰もが現代美術を享受できる場を作る。 ■おむつ替えスペースの設置やベビーカーの無料貸出等、小さなお子様連れでも安心して美術館での鑑賞を楽しむことができる環境を整える。 ■スマートフォンやタブレット端末を用いて、インターネット経由での展覧会の鑑賞の他、より現代美術に親しみやすい環境を整える。	■手話トークの実施や触察マップ、大型の触察模型の制作、エントランスへの配置等、幅広い来館者層が享受できる現代美術の場を創出できた。 ■アートブックフェアでは館内の飲食スペース、休憩スペースの飽和状態を鑑み、サービス向上の一環としてキッチンカーの設置、休憩スペースを設けた ■展覧会出品作家インタビューをウェブ公開する等、企画理解促進を図った。 ■特別支援学校等を対象としたスクールプログラムの実施、手話及び音声による屋外彫刻作品の解説動画作成した。
		評価指標　バリアフリーに関する取り組みの件数、アンケート、満足度調査による満足度、未就学児の割合	・手話通訳導入8回・手話研修9回実施・ロジャー導入5回・触察用フロアマップの閲覧配布、触察模型の作成及び設置
	8	■近隣施設や商店街等と連携し、地域における街づくりの核となることで、伝統と現代が共存・融合する都市・東京のイメージをアピールする。 ■地域との密なコミュニケーションを図り、誰もが文化に触れられ、参加できる親しみやすい施設づくりを目指す。 ■地域と連携した事業を積極的に実施し、地域経済の活性化と観光拠点としての役割を果たす。	■東京アートブックフェアでは坂本展に先駆け「坂本図書分室」による特別展示や、企業のスペシャルブースも登場し、来場者に向けた多彩なコンテンツを提供した。 ■区民まつりや町内清掃への参加、イベントへの協力など地元区、町会、商店街等と積極的に連携した。館と地域が連携を深めることで、伝統と現代が同居する清澄白河地域の発展に寄与している。
		評価指標　地域連携活動の実践	【江東区】① 江東区民まつりへの参加②スタンプラリーへの協力【地元町会（三好4丁目）】③ 毎月一斉清掃への参加④ イベントへの協力【地元商店街】かかしコンクールへの協力【東京ｱｰﾄﾌﾞｯｸﾌｪｱでの地域連携】近隣施設、イベントを紹介した「NEIGHBOURS（ネイバーズ）」エリアマップ作成【坂本展】地域内のギャラリー、店舗8 ヶ所で「リスニングデー」を展開

	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度基準値	R6年度実績値
観覧者数（人）	437,908	463,723	664,845	430,000	758,006
自主事業参加者数（人）	33,407	28,307	54,663		33,927
若手作家の支援（人）	10	13	13		8
協賛金の獲得金額（千円）	10,235	10,000	4,039		6,423
HPのアクセス件数	6,700,574	9,160,852	10,091,451		9,429,463

総合的な所見（自己評価の総評）

・コレクション展では、各期ごとにテーマを設定し特色ある展覧会を開催した。近年の新規収蔵作品を積極的に紹介するとともに、関連事業の充実や企画展との相乗効果や補完性にも配慮するなど、年間を通じバランスのよい構成とし、コレクションの重要性と魅力を幅広い来場者に示すことができた。企画展では、話題性に富む大型の映像インスタレーション、日ごろの学芸員の調査研究に基づく日本現代美術史展、若手作家のグループ展、中堅作家の再評価につながる初の大規模個展など、館のキュレーションの力を十分に発揮し、クオリティが高く、充実した内容の展示は高い評価を得た。
・観覧者数は、高橋コレクション展、坂本龍一展という集客力の高い展覧会を展開し、コレクション展は年間13万人を超えたこともあり、展覧会総入場者数が歴代1位となり、令和5年度に引き続き令和6年度も定量的にも定性的にも非常に充実した年となった。
・展覧会とともに館の活動の一翼を担う教育普及事業は、展示室での対話を介した鑑賞活動が増え幅広く様々なプログラムを実施した。手話通訳や補聴援助システムを導入した回も設けた。特に本事業では、触察ツールの開発や特別支援学校を対象としたスクールプログラムなど、あらゆる鑑賞者に開かれた美術館を目指した取り組みを積極的に進めた。美術館全体としても、デフリンピックに向け、アクセシビリティの向上を目指す東京都の方針とも平仄を合わせ、引き続きこうした対応を強化していく。
・その他、コレクション展の観覧料を全中学生を対象に無料としているほか、館独自の学生無料デーの実施、SNS発信強化など、若い鑑賞者の育成にも力を入れている。また、地元のイベントや清掃活動等に積極的に取り組むなど館と地域との連携を深め、清澄白河という街の発展に寄与している。

外部評価 評定結果	総括的な意見（総評）
A：目標を十分に達成し、成果を上げている A：目標を十分に達成し、成果を上げている B：目標を概ね達成している C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である	○自主企画展はコレクション展と併せて、開館30周年を前に将来の美術館のあり方を真摯に考えていることが分かる内容となっており、その目標に見合う成果を得たことを評価したい。今後は、コレクション展をどう見据えていくかが評価のポイントになってくる。 ○展覧会への入館者数という数を評価する一方で、展覧会の質も重要な要素であり、性質の異なる質と量のバランスをうまくとった運営がなされている。コレクション展は、現代美術館の日本を代表するようなコレクションを活かし、企画力の高さをうまく伝える新しい提案に期待している。 ○予想を超える入館者に対して、適切な誘導、迅速な対応がなされており、管理のスキルの向上に目を見張るものがあった。今後もさらに来館者が増えることも見越し、入館者が観覧中どう休息をとるか、入館者の心理的ストレスをどう緩和するかが新しい課題としてあると思われる。 ○歴代入館者数一位となった坂本龍一展と日本現代美術の一つの潮流をつくった高橋コレクションを、きちんと組織し広報活動を行い、普段現代美術に関心を持たなかった層にもアピールする展覧会をやり切ったことを高く評価したい。一方で、人が来すぎることをどう考えるかという課題もある。集客の目標もどこかで区切り、これ以上は入館させないという運営の考え方もあり得る。海外の美術館には、企画展を見に行くというより、その国や都市の文化を概観する意味合いにおいてその美術館のコレクションを見に行くという行為が一般的である。 ○多様なプログラムで教育普及活動が実施され、あらゆる鑑賞者に開かれた取組がすすめられた。

令和6年度目標達成シート

基本方針

東京都美術館は、展覧会を鑑賞する、子供たちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害のある方が何のためらいもなく来館できる、すべての人に開かれた「アートへの入口」となることを目指します。
新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界との絆が深まる「創造と共生の場＝アート・コミュニティ」を築き、「生きる糧としてのアート」と出会う場とします。そして、人々の「心のゆたかさの拠り所」となることを目指して活動していきます。
来る開館100周年（令和8年）を機に、芸術文化による社会包摂と心身の健康と幸福を目指し、新しい美術館モデルを切り拓いていきます。
そのため、美術館の運営にあたって4つの役割を掲げます。

1 「世界と日本の名品に出会える美術館」
2 「伝統を重視し、新しい息吹との融合を促す美術館」
3 「人々の交流の場となり、新しい価値観を生み出す美術館」
4 「芸術活動を活性化させ、鑑賞の体験を深める美術館」

この基本方針のもとに4つの事業を展開します。
① 展覧会事業＝特別展や企画展など、見る喜び、知る楽しさを提供する。
② 公募展事業＝公募団体やグループと連携し、つくる喜びを共有する。
③ アート・コミュニケーション事業＝アート・コミュニティ形成による新たな可能性を探求する。
④ アメニティ事業＝アートラウンジや美術情報室、ミュージアムショップ、レストラン等、訪れる楽しさを充実させる。

	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度基準値	R6年度実績値（R7年3月末現在）
特別展観覧者数（人）	573,731	643,683	921,379	700,000	616,349
自主企画展観覧者数（人）	34,286	88,761	60,378		59,964
公募展示室割当時稼働率	97.8	98.2	96.5	〈100〉	94.8

※R6年度基準値は、提案書の基準値

令和6年度達成目標

重点1・2

1

「アートへの入口として「創造と共生の場」を形成する。」
令和6年度は、社会情勢に柔軟に対応し、グローバルかつ計画的視点を持って事業を確実に実施していく。館活動全体で、ダイバーシティ対応などホスピタリティの向上に努めるとともに多角的な広報運営を推進する。また、来館者の安全安心を最優先に施設運営を行いつつ、訪れる楽しさを充実させる「アメニティ事業」を展開する。さらに、アート・コミュニケーション事業を中心に、子供、青少年、高齢者、障害者、外国人等が主体的に美術館活動に参加できる活動の場を拡張し、ミッションの実現に向けた取組みを推進する。国内外の連携機関と、ICT技術を活用して勉強会を開催し、社会課題に対応する先端的な事例の共有などを行う。また、公募展示棟ロビー階第3公募展示室で夏季期間に「アート・コミュニケーション事業を体験する2024」を開催し、多様な人々が参加できるプログラムを積極的に行う。

評価指標：ICTを活用したアートコミュニティ形成に関わる事業…とびラボ開催回数（延べ）
間口を広げ、市民が主体的に関わる仕組みづくり…アート・コミュニケーション事業のプログラム回数

2

「世界と日本の名品に出会える美術館である」
特別展では、前年度より引き続き「印象派　モネからアメリカへ　ウスター美術館所蔵」展を4月に開催し、春から夏にかけては「デ・キリコ展」を開催する。デ・キリコ展では、ローマのデ・キリコ財団の所蔵品を中心に、20世紀イタリアを代表する作家の70年に及ぶ仕事を総合的にご覧いただく。「田中一村展　奄美の光 魂の絵画」では、奄美の田中一村記念美術館の協力のもと、代表作を含む絵画を一堂に集めた大回顧展を開催し、画壇から距離を置きながら自らの芸術の探究に一生を捧げた一村の求道的な歩みを紹介する。「ミロ展」では、ピカソと並びスペイン20世紀の巨匠であるミロの芸術を初期から晩年に至るまで、見ごたえのある代表作でご覧いただく。安全第一の運営に努めながら、より良い鑑賞環境の下で世界の名品を味わっていただく。また次年度以降の展覧会の準備を着実に進める。

評価指標：年間特別展観覧者数（人）

3

「新たな価値や可能性を見出す展覧会等を実現する」
企画展では、「大地に耳をすます　気配と手ざわり」展を開催する。実際に地域で生活しながら自然と対話しつつ制作を続ける日本の現代作家5人（榎本裕一、川村喜一、倉科光子、ふるさかはるか、ミロコマチコ）の多彩な表現を紹介する。絵画のみならず、写真、インスタレーションなども展示して、若年層の来場者の拡大を積極的に推進する。「コレクション展」では、財団内の他施設と連携して、東京都コレクションを積極的に活用し、都民に分かりやすく紹介する。

評価指標：企画展とコレクション展の入場者数（人）

4

「作品発表の場の提供と新たな創造性を共有する美術館である」
公募展事業では、学校教育展、公募団体展を滞りなく安全に実施する。また、令和8年度の単年度使用割当を円滑に決定する。公募展活性化事業では、「上野アーティストプロジェクト」、「都美セレクショングループ展」を着実に実施するとともに、次年度以降の実施に向けた準備もしっかりと進める。

評価指標：公募展示室使用割当時稼働率（%）

重点3

5

「アートを介して多様なコミュニティの形成を行い、社会課題の解決に取り組む」
アート・コミュニケーション事業では「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」そして教育普及活動を着実に実施するとともに、「Creative Ageing ずっとび」を事業計画に沿って確実に推進する。「ずっとび」では高齢者や障害者と文化施設をつなぐ仕組みづくりに向けて調査・研究を行い、引き続きプログラムを着実に実施する。

評価指標：「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」に取り組む…(「ずっとびプログラム」を2種実施、7月～8月に公募棟LB3で「アート・コミュニケーション事業を体験する2024」を開催)」(プログラム実施回数)

6

「様々な主体とのネットワークを強化しながら上野地域の文化施設の中で中核的な役割を果たす。」
上野周辺地域の文化および商業施設とのネットワークを強化することにより、地域の魅力を高めることを目指す。顕在化していない地域の様々な文化資源も含め、横断的にそれらをつなぐアート・コミュニケーション事業の実施や、地域連携による着実で積極的な広報活動を行う。

評価指標：上野周辺地域の文化および商業施設との連携

成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

ホスピタリティ向上のため、講演会での手話通訳と文字情報提供を常態化。良好な鑑賞環境保持のため、土日祝日及び終盤の平日は、特別展で原則日時指定制とした。「ミロ展」でキッチンカーを出店、アメニティ事業の展開に資した。アート・コミュニケーション事業では活発な活動を継続。国立アートリサーチセンター等の連携機関とのオンラインを含む勉強会を実施した。また、「アート・コミュニケーション事業を体験する2024」にて、クリエイティブエイジングや認知症をキーワードに同事業を分かりやすく紹介、会場にはアート・コミュニケータが常駐し、筆談を用いた鑑賞ワークショップ等を行い、様々な来場者をサポートした。

「印象派」展では、その世界的受容と展開を紹介。「デ・キリコ展」では良質な作品を軸とした回顧展を実現。「田中一村展」は画業を総覧する大回顧展となり、「ミロ展」は複数の代表作を集め、国内での決定版的な内容となった。
なお、年間観覧者数は、基準値に届かなかったが、これは特別展の開催日数が基準値の算定根拠となる250日より50日少なかったことによるものであり、開催一日当たりの観覧者数に換算すると、むしろ基準値を大きく上回っている。

「大地に耳をすます」では、自然を主題としつつ、様々な連想へ誘う展示構成とした。「コレクション展」は「懐かしさ」の主題の下、財団所管施設と連携し東京都コレクションの活用に資した。

学校教育展・公募団体展を安全に実施。使用割当を円滑に決定。「都美セレクショングループ展」「上野アーティストプロジェクト」とも着実に実施。AP展は高い動員と満足度を得た。

本年度も活発な活動を継続。「Creative Ageing ずっとび」では医療・福祉機関と連携、プログラムを実施した。また特別展、企画展と連動させ、ワークショップやレクチャーなど多様なプログラムを実施した。

「Museum Start あいうえの」による上野公園の文化施設の連携を継続しながら、広報においても引き続き上野の商業施設との連携広報の取組みを積極的に行った。

総合的な所見（自己評価の総評）

安全を第一に美術館運営を行った。特別展においては、引き続き、土日祝日を基本とする日時指定制を実施。また、講演会での手話通訳や日本語字幕の実施を標準化し、特別展出品作品の触図や収蔵品レリーフの触察模型等を制作するなど、アクセシビリティの向上や鑑賞サポートに努め、ショップ、美術情報室、レストラン等において、丁寧な来館者対応を日々心掛けるよう努めた。
「印象派　モネからアメリカへ　ウスター美術館所蔵」では、印象派の世界的受容と展開を日本の外光派などの紹介も加えて分かりやすく紹介。「デ・キリコ展」では、20世紀を代表する画家の一人でありながら、日本ではなかなか全体像を見る機会のない画家の極めて良質な回顧展とし、過去最高の満足度を達成した。「田中一村展　奄美の光 魂の絵画」では、未だ十全に美術史への位置づけのなされていない画家の真髄に迫る、決定版的な大回顧展を実現し、近代日本画家の個展としては異例の動員を達成した。「大地に耳をすます」では、自然をテーマにし、自身もそこに密接に関わるなか、多様な表現を生み出す5人の現代作家たちにより構成。「懐かしさの系譜―大正から現代まで　東京都コレクションより」では、「懐かしさ」をテーマに、絵画、写真、資料などでたどる展示とした。いずれも、目標以上の入場者数と満足度を達成した。
公募展事業では、年間を通じての公募展運営とともに、令和8年度の単年度使用割当を円滑に決定するとともに、次期の新たな使用割当に向けての見直しを行った。「上野アーティストプロジェクト2024ノスタルジア―記憶のなかの景色」では、ノスタルジアを強く感じさせる風景、人のいる情景、幻想絵画などを描いてきた個性的な8名の作家たちを紹介、関連事業ではダンス・ウェルの実施の他、トークイベントにて文字通訳を配備しアクセシビリティへの工夫も行った。「都美セレクション グループ展2024」では、絵画、写真、映像など現代美術の動向を反映する3つの企画を実施した。
アート・コミュニケーション事業では、本年度も「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative Ageingずっとび」で、引続き活発な活動を続けた。また、「オールジャパン戦略事業」では、本年度から事業の実装を開始した愛媛県や川崎市も含めて、アートを介してコミュニティを育む事業を行っている全国の拠点をつなぎ勉強会を進めた。「Creative Ageingずっとび」では、アクティブシニアを対象に身体を動かし人生をふりかえるワークショップや、初期認知症の高齢者とその家族を対象にアート・コミュニケータと作品を一緒に鑑賞するプログラムを台東区の医療・福祉機関と連携して実施した。公募展示室では「クリエイティブエイジング」をキーワードに、上田薫・葉子夫妻の作品展示とともに、これまでのアート・コミュニケーション事業を一般に分かりやすく紹介する「アート・コミュニケーション事業を体験する2024」を実施した。上野公園の文化施設の連携を継続しながら、広報においても引き続き上野の商業施設との連携広報の取組みを積極的に行った。令和7年度においても、「アートへの入口」を標榜する当館ならではのバラエティに富んだ事業展開を行うとともに、2026年の開館100周年に向けて、着実に事業を実施していく。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

2024年度の本館活動・運営を評価的に総括するとすれば、第一に、文化芸術領域におけるダイバーシティを先進的に追及し実績あるモデルを定着しえたということである。第二に、各種展覧会を中心とする作品・資料保存・活用・鑑賞にかかわる諸事業においては、特に本年期せずして既存美術評価軸・価値規範・20世紀美術史枠組の再考を誘う展示を相次いで実現し、大きな成果を上げたことを指摘しておきたい。いずれの展覧会も、その個々の美術家のみならず、20世紀美術枠組みそのものの再検討までをも誘う意義を有するものと言える。。「大地に耳をすます」展や「ノスタルジア」展、そして「都美セレクション」3グループ自主企画展といった諸事業は、総体として本年の展覧会事業を極めて意義高いものとしており、いずれも創意と主体性を感じさせる活動によって適正かつ活発に遂行され成果をあげている。
すべてにおいて質の高い取り組みの見られた一年であった。特別展・企画展ともに企画がよく練られ、会場の構成も分かりやすいものだった。特に「デ・キリコ展」や「田中一村展」は、わが国におけるこれら芸術家の評価を語るうえで重要なイベントとなったことであろう。特別展・企画展の関連事業も充実していた。
アート・コミュニケーション事業はこれまでと同様に高いレベルの活動が行われており、国内他館に模範を提供するものであった。社会においてアクセシビリティやダイヴァーシティがますます重視されることは間違いなく、これらに着目したプログラムは日本の美術館・博物館から注目されることだろう。
展覧会事業として共催展（「印象派」、「デ・キリコ展」、「田中一村展」、「ミロ展」）の開催だけでもたいへんな労力を必要としているが、さらに自主企画展（「大地に耳をすます」、「ノスタルジア」、「コレクション展」）を開催している。加えて、公募展事業、アート・コミュニケーション事業、アメニティ事業を実施し、少数精鋭スタッフで効率的に効果的に運営していることは称賛されるべきである。様々な活動に領域を広げているアート・コミュニケーション事業は全国の美術館にとって参考事例となる模範的活動といえるだろう。
美術館にあらゆる人々を迎え入れようとするアクセシブルな姿勢が、、アート・コミュニケーション事業や広報戦略によって強く打ち出されている。来館者像を広くとらえ、美術愛好家のみならず、ファミリー、子ども、学校に加え、高齢者や障害者、外国人、日本語を母語としない人など、それぞれが必要とするニーズを的確にとらえ、社会共生担当を置くなどして、意欲的に対応している。この姿勢は、美術館の役割についてのイメージを更新させる力強さがあり、都美の存在を際立たせていると感じる。

【東京都庭園美術館】

令和6年度目標達成シート

資料3-6

基本方針

1　歴史的建造物である本館の保存とその公開

2　装飾芸術に基づく新たな価値を今日の社会に活かす展覧会・各種事業の実施

3　「歴史的建造物」、「装飾芸術」、「庭園」を三本柱とする文化的都市空間の形成

4　あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現

東京都庭園美術館は、本館が昭和8(1933)年に建築されたアール・デコ様式の歴史的建造物であることから、昭和58(1983)年の設立以来、その「保存」と「活用」を運営方針としてきました。

保存の面では、開館を期に本館の修復作業に着手し、また毎年、アール・デコ様式の調査研究を兼ねた「建物公開展」を開催してきました。その成果のひとつとして、本館は平成27(2015)年に、国の重要文化財「旧朝香宮邸」に指定されています。

活用の面では、アール・デコという言葉が、「装飾芸術」(建築、デザイン、工芸、家具、美術等に表れる装飾性)を意味するフランス語に由来することから、これまで国内外の美術作品を、主として装飾芸術の観点から取り上げる展覧会を企画してきました。

平成26(2014)年の新館改築を機に、館の運営方針には、「新たな価値の創造」が加えられました。これによって庭園美術館の展覧会事業には、今日の視点で装飾芸術を創造する芸術家の作品を展示することが加わりました。

このほかに東京の文化の魅力の創造と発信に寄与するために、装飾芸術の価値を今日の社会に生かすという視点から、庭園の活用事業をはじめとして、さまざまな教育普及事業にも取り組んでいきます。

以上の経緯により、庭園美術館は、重要文化財である「旧朝香宮邸」の保存と公開を基盤に、装飾芸術の力によって、東京という都市のこれからの課題である多文化共生、環境問題などに対応し、すべての都民の心を豊かにする場となることを目指していきます。

	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度実績値	R6年度基準値	R6年度実績値
観覧者数(人)	123,886	151,537	166,194	185,000	219,181
庭園のみ入場者数(人)	39,110	64,104	70,542		73,619
自主事業参加者数(人)	1,009	3,389	8,217		24,483

令和6年度達成目標 / 成果と課題(評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応)

		令和6年度達成目標	成果と課題(評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応)
重1	1	旧朝香宮邸の適正な維持管理及び調査研究 ・重要文化財に指定されている旧朝香宮邸本館・茶室を、緑あふれる庭園とともに適切に維持管理しつつ、歴史的沿革や建築史・美術史的特徴などに関する調査研究を通してその価値を高めていきます。	重要文化財「旧朝香宮邸」を適切に維持管理しつつ美術館として活用していくための基本指針となる「旧朝香宮邸保存活用計画」の更新に当たり、策定主体である東京都を補佐するかたちで、様々な情報の収集や日頃の調査研究に基づく知見の提供などを通じて貢献した。また、美術館講座や保存活用に関するミニレクチャーの開催を通して、来館者に当館の活動を知ってもらう試みにも取り組んだ。
		評価指標　旧朝香宮邸に関する調査研究の継続的実施、展覧会や紀要等を通して成果を公開	旧朝香宮邸保存活用計画策定支援、建物関連講座・トーク等6回実施、紀要執筆
	2	建物公開展の実施を通じた重要文化財「旧朝香宮邸」の価値の発信 ・旧朝香宮邸に関する調査研究の成果を反映した「建物公開展」を開催し、都民共有の貴重な文化遺産に親しみつつ後世に継承するための契機とします。	令和6年度建物公開展(受託事業)として「建物公開2024 あかり、ともるとき」を開催した。本館(旧朝香宮邸)内の照明器具に着目し、ユニークなデザインの源泉や現状との相違点など日頃の調査研究から得られた新知見を、来館者が楽しみながら理解できるよう展示に工夫を凝らしつつ紹介した。本館装飾の中でも人気の高い照明器具を取り上げたことで、高い満足度を得ることができた。
		評価指標　建物公開展入館者数、満足度	入場者数55,302人(一日平均1,106人)、満足度98.4%
	3	装飾美術の観点から内容を選定した企画展覧会を開催し、優れた作品等の鑑賞機会を提供 ・アール・デコ様式の原点である「装飾美術」の観点から、幅広いジャンルの多様な表現を採り上げ紹介します。また、トークイベントやワークショップなどリアル参加型の事業を充実させ、当館ならではの鑑賞体験を提供します。 ・当館の空間特性を活かし、新たな展示手法の導入を通じて国内外の美術を魅力的なかたちで紹介します。	令和6年度企画展として「生誕140年　YUMEJI」「そこに光が降りてくる　青木野枝／三嶋りつ惠」「戦後西ドイツのグラフィックデザイン」を開催した。いずれも会場構成に工夫を凝らし、アール・デコの装飾空間と一体となって作品と向き合う当館ならではの鑑賞体験を提供することができ、前年度から継続して実施した「旧朝香宮邸を読み解くA to Z」と併せ、企画展だけで約164,000人もの来館者を記録した。
		評価指標　講演会やオンラインツアーなど関連事業の開催	関連事業:講演会3回、Gトーク3回、ワークショップ2回、コンサート2回、映像配信2本
	4	建物や庭園などの文化資源を活用した教育普及等の事業の実施 ・本館に施された装飾をテーマとしたワークショップや、庭園・茶室を活用した各種イベント等の開催を通じ、文化財の価値や意義を楽しく理解できるよう工夫します。	各展覧会毎に鑑賞の手引きを兼ねた作品リストを配布したほか、中学生以下の来館者を対象としたガイドやワークシートを作成した。さらに「生誕140年　YUMEJI」では、展覧会の内容に合わせて本館装飾をモチーフとした和綴じ本やレターセットの製作体験を親子で楽しめるワークショッププログラムを提供した。また、スクールプログラムでの活用を目的とした「東京都庭園美術館ジュニアガイド」及び教員を対象とした展覧会シートを作成した。
		評価指標　建物や展覧会鑑賞用の独自ツールを活用した学校連携等の実施	各種鑑賞ツールを用いた学校団体受け入れ17校、教員向け特別研修会1回
重3	5	ユニークな空間特性を生かし、豊かな文化的体験の場を提供 ・庭園や茶室を有する当館のユニークな環境特性を活かし、伝統文化を学ぶ若年層と在住外国人の日本理解の取組等を繋ぐイベントを開催し、多様な文化的価値を体感できる場を創出します。	茶室「光華」を活用した季節毎の茶会を実施したほか、親子を対象とした「こども茶会」や、茶室の建築に焦点を当て、専門家を講師に招聘してのトークイベントを開催した。また、都内の高校茶道部と各国大使館やその下部組織との交流を通した多文化共生プログラム「光華倶楽部」を実施し、4組4回の交流茶会を実現させた。
		評価指標　庭園や茶室を活用した若年層向けイベントの開催	こども茶会1回、光華倶楽部(交流茶会)4組4回
	6	庭園を活用した地域連携事業の実施 ・近隣他施設や組織と連携し、庭園を活用した魅力的な事業を開催します。	今年度も喜多能楽堂との共催による「庭園能」を実施したほか、地域で活動している組織と連携しての「庭園マルシェ」や、開業140周年を迎えたJR目黒駅とのコラボレーションによるミニ列車乗車体験イベントの開催、さらには大井競馬場メガイルミへの出張プロモーションや近隣店舗と共同でのオリジナル商品の開発など、新しい試みに意欲的に挑戦した。港区との共催によるガーデンコンサートや、近隣他施設との相互割引も継続して実施した。
		評価指標　庭園を会場とする伝統芸能公演やガーデンコンサート等の実施	庭園能3公演、ガーデンコンサート1回、庭園マルシェ1回ほか
重2	7	共生社会を志向する事業と施設管理 アクセシビリティプログラム＆ダイバーシティプログラムの充実 ・共生社会の課題に対して美術の力で貢献できるよう、アクセスをためらいがちな障害のある方、子育て世代、多様な文化背景を持った方たちを対象とした各種プログラムを実施し、多様な都民への鑑賞及び体験機会の拡充を図ります。	昨年度より本格実施している「フラットデー」を継続して実施し、各展覧会毎にゆったり鑑賞日とベビーアワーを設け、障害のある方も子ども連れの方も気兼ねなく展覧会を鑑賞できる機会を提供した。また、やさしい日本語で美術館を楽しむプログラム「庭で見つける小さな星」を実施し、多様な文化背景の人々が当館庭園での自然観察を通して相互に理解を深める機会を提供した。さらに、年度内実施のすべての講演会に手話通訳と文字表示、ヒアリングループを導入し、情報保障の充実を図った。一部の茶会でも情報保障に取り組んだ。
		評価指標　アクセシビリティプログラム及びダイバーシティプログラムの実施	フラットデー6日間、情報保障付きプログラム14回、ダイバーシティプログラム1回
	8	様々な媒体を通じた美術館活動の国内外への発信 ・グランドデザインに基づく取組みを実施していく中で、ユニークベニューの新メニューや敷地内回遊性向上策などの紹介を通じて、新たな庭園美術館像を国内外に発信し、ブランド力の向上に繋げていくきっかけとします。	前年度、実証実験を元に整備したユニークベニュー新要綱に基づき、一般来館者への鑑賞機会提供を条件とする特別枠を一件受け入れ、相手方の国際的な認知度と発信力を利用して当館のブランド力の向上へと繋げた。さらに庭園能や庭園マルシェ、ガーデンコンサートなど庭園を活用した各種取り組みを記録したプロモーション映像を製作し、「開かれた美術館」をアピールする一助とした。
		評価指標　グランドデザインに基づく庭園活性化事業等の情報発信	プロモーション映像の製作1本

総合的な所見(自己評価の総評)

開館40周年の節目を迎えた昨年度、当館では年間を通じてさまざまな記念事業を展開しつつ、ユニークな環境特性を活用した新たな可能性に挑戦する端緒とした。令和6年度は、さまざまな記念事業を通して培った経験を元に、より充実した美術館活動に取り組んだ一年となった。年度内に開催した「生誕140年 YUMEJI展 大正浪漫と新しい世界」「建物公開2024 あかり、ともるとき」「そこに光が降りてくる 青木野枝／三嶋りつ惠」「戦後西ドイツのグラフィックデザイン モダニズム再発見」の4本の見応えある展覧会に加え、鑑賞体験をより深めるための美術館講座や各種ワークショップなど多彩なプログラムも意欲的に展開した。また、来館するすべての人がフラットに、安心して楽しめる環境創りを目指した「フラットデー」の継続実施や、アクセシビリティ向上を目的とした各種取り組みを通し、「誰にでも開かれた美術館」の実現に向け、職員一人ひとりが創意工夫を凝らした。回遊性の向上と庭園利用の活性化に向けた施設整備計画「グランドデザイン」の本格始動とともに、庭園マルシェやJR目黒駅開業140周年を記念したコラボイベントなど地域との連携事業も意欲的に展開し、新たな魅力の創出を図ったことも今年度の特徴となった。当館が活動の軸としている「装飾芸術」は、日常のあらゆる場面を対象とし、そこに美術的なアプローチを施すことによって、生活に潤いと豊かさをもたらすことを理念としている。日常生活の中で実際に体験し、応用し、そこからさらに新たな価値を創造することこそが装飾芸術の本質であり、当館がこれから目指すべき姿もそこにあると考える。たんに展覧会を鑑賞する場としてだけではなく、あらゆる人々が集い、交流し、発信する機能をも含めた双方向的な存在となってこそ、真の意味での「誰にでも開かれた美術館」を実現し得る。令和6年度、当館は新たな可能性に向けた第一歩を記した。(牟田)

外部評価 評定結果

A

A:目標を十分に達成し、成果を上げている
B:目標を概ね達成している
C:目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見(総評)

組織運営では、事業係(学芸)と管理係がそれぞれに重要な事業を担当することにより、各人が達成感を得やすく、館全体の活気を生み出していると感じた。企画展では自主企画と巡回展をバランスよく組み入れて若干の負担軽減を図りつつも、ヴァリエーションを増やしてさまざまな人を呼び込む良質な内容を維持している。建築を活かした企画にはいつも感心させられるが、とりわけ現代美術に挑戦した青木・三嶋の二人展のダイナミズムは素晴らしかった。そこには「新たな価値の創造」というテーマもきちんと取り入れられている。さらに地域との連携も含めた様々なイベントに積極的に取り組み、来館者層の拡大を図り、大きな成果を上げたと言える。従前のファン層を大切にするとともに、これまでは来館や鑑賞をためらっていた層に向けた仕掛けを周辺の企業等とタイアップした取り組みは奏功したのではないだろうか。普及事業に力を注いでいることも理解できたし、社会共生担当の着任によるアクセシビリティ向上の取組は、他館も含めたこれからの美術館活動の一つの指針となるだろう。重点事業の選定が数値よりも質を重視する傾向にあることが興味深く、独自性が感じられた。なお来館者数が増加する一方で、作品の保全のためにも混雑時の人の流れを想定した工夫が必要であろう。一定程度の徒列があることで、入場者のコントロールができるというメリットもあるのかもしれないが、徒列の短縮に向けた取り組みは継続した課題かと考える。学芸員の入れ替わりが早いことは少し気になった。人事に関しては評価資料だけではうかがい知ることはできないが、もったいないように思える。今後も活動のベーシックな姿勢を大切に、更なる発展へと着実な歩みを進められることを期待する。